

## 桐生市議会 教育民生委員会 行政視察報告書

視察都市	秋田市（人口 314,911 人）
視察日時	平成 28 年 10 月 18 日（火） 14 時 00 分 ～ 16 時 00 分
視察項目	・エイジフレンドリーシティ構想について

### ◎視察概要

視察項目 ・エイジフレンドリーシティ構想について

#### （1）説明要旨

高齢化、都市化に対応するため、「高齢者にやさしい都市」をめざしてまちづくりをしていく考え方。

高齢になっても地域社会で活動、活躍しながら年齢を重ねられるまちの実現には 8 つのトピックについて検証が必要。

計画、実施、検証を 5 年サイクルで行われ、このサイクルの全てに市民が参画することが特徴的。

#### （2）主な質疑応答

1. エイジフレンドリーシティの世界展開の状況と日本国内の状況は？

A. 平成 28 年 10 月現在、世界 36 か国、332 都市（地域）が参加している。日本では、秋田市と宝塚市が参加。

2. 行動計画の具体的事例における行政のかかわり方について。

A. 市民の会がつくられ、行政が補助金（上限：年間 150 万円）を交付。普及啓発のチラシやグッズ等を販売。

今後、市民の会に対しては、補助金からの独立を図っていく。

3. 市民における構想の理解を深めることについての現状の取組は。

A. 各種講演会やワークショップによる意識啓発、エイジフレンドリーシティ通信の発行などにより、市民協同によるエイジフレンドリーシティの実現を推進している。

### (3) 参考なる点及び課題

エイジフレンドリーシティに実現には市民の自主的、自覚的な活動が市全体に広めることが不可欠であり、市民意識、参加体系をいかにするかが問われる。また、高齢者へ偏りぎみになっている政策を全ての年齢層を取り込んだ事業、施策展開が課題となる。

高齢者向けの施策、事業を考えると、福祉という視点からスターすることが多いが、高齢者がいかに長く強く社会に参加を促すかという視点はまちづくりへのエネルギーを増し、高齢者の幸福実感にもつながる点は桐生市の高齢者行政にも参考になる点である。

#### ◎視察成果による当局への提言または要望等

高齢者への施策、事業を考えると、福祉の視点のみならず高齢者自身がまちづくりに参加できるようにすることが必要。

そのために、高齢者へ偏りの傾向がある施策、事業を全ての年齢層をも取り込んだものにしていただきたい。

## 桐生市議会 教育民生委員会 行政視察報告書

視察都市	新発田市（人口 99,761 人）
視察日時	平成 28 年 10 月 19 日（水） 13 時 30 分 ～ 15 時 30 分
視察項目	・食の循環によるまちづくりについて

### ◎視察概要

視察項目 ・食の循環によるまちづくりについて

#### （１）説明要旨

食の循環とは、新発田市は平成 20 年度から取り組んでいる。もともと、新発田市の産業構造として食品製造業が新潟県の平均 19.3% を大幅に上回り、41.3% にもなっている。また、平成 15 年ごろに市内の土地がやせはじめ、自然由来のカドミウムが検出されるなどがきっかけとなり、食と農について考える気風が生まれていた。

平成 18 年度に、「食（食育）」を中心に据えた「重点課題の推進」を基本計画として位置づけ、翌年度には条例制定に向けて、識者、公募市民、関係機関、民間団体、関係課職員がワークショップ形式で具体的な検討に入った。翌平成 20 年 12 月に「食の循環によるまちづくり条例」として制定された。

条例として特徴的なのは、1：産業の発展 2：健康及び生きがいの増進 3：教育及び伝承 4：環境の保全 5：観光及び交流の基本点施策を中心にしつつ、市民や事業者、行政の役割、責務をあえて条文上に盛り込み、3 者が協同して取り組み、役割を明らかにしている。

「食の循環によるまちづくり」とは、毎日の「食」の大切さを認識し、「食の循環」を形成し、健康で心豊かな人材の育成、産業の発展、環境との調和、「地域の活性化」と「市民生活の質の向上」を目指す。

新発田市の食の循環では、「肥料・土づくり」から始まり「栽培・収穫」、「加工」、「販売・購入」、「調理」、「食事」、「残さ処理」を順に行うことを考え、実施している。

主な事業として、市内3か所の有機資源センターに集められた、家庭や食品加工で出た生ごみや畜ふん、もみ殻などを市内3か所の有機資源センターに集め、堆肥にし、販売する「家庭生ごみ堆肥化推進事業」を実施している。また、「もったいない推進運動事業」として市内の飲食店、宿泊施設などで「食べきる」「食べ残しを減らす」取り組みに協力する、「もったいない運動」協力店の募集を行っている。協力店には、「取組賞」のほか、チラシ、タペストリーなども設置。また協力店の地図と紹介記事を掲載したチラシの全戸配布を行っている。

教育の場でも「食とみどりの新発田っ子プラン」として、「食の循環によるまちづくり」に直結した「食育」を行い、将来を担う人材育成にも力を入れている。

この取り組みのため、市内すべての小中学校に「食育推進委員会」を設置、栄養士も全校に配置できるよう努めている。これにより学校、家庭、地域の連携を図っていく。

栄養士による食育指導や、生徒・児童が農作物を栽培、加工、調理、試食を行い、「食の循環」を実感する授業も行われている。

## (2) 主な質疑応答

Q 検討委員会の委員による横の連携はどうしているのか？

A 民間各分野の代表と相談する。「食の循環」を定着させるため、民間の委員を通じて、他の団体を紹介してもらうなど、連携を深めている。

Q 世代間で受け止めが違うことも。家庭で「循環」を定着させるためにとりくんでいることはなにか？

A 各家庭に差があり、全体に定着していない。小学校などでの教育で子どもに定着させ、「循環」に取り組む世代をあげていく。

## (3) 参考なる点及び課題

課題として、世代間の認知度や実施状況などがあり、普及啓発に苦慮している。有機資源センターも処理限界となりその点も課題となっている。

### ◎視察成果による当局への提言または要望等

市の計画として位置づけ、事業を展開することは大変重要である。学校など教育の場で「食の循環」を定着できれば、将来的に大きな意義がある。持続可能な社会形成のため、また将来の人材育成のために「食の循環によるまちづくり」から学び、桐生でも可能なかぎり、条例が制定されることが望ましい。

## 桐生市議会 教育民生委員会 行政視察報告書

視察都市	長岡市（人口 275,584 人）
視察日時	平成28年10月20日（木） 9時30分 ～ 15時00分
視察項目	・タニタカフェについて ・子育て駅について

### ◎視察概要

視察項目 ・タニタカフェについて

#### （1）説明要旨

長岡市の市部局が横断的に取り組んでいる、長岡市多世代健康まちづくり事業を行っている。この事業のなかで健康の3要素である、「食事」「運動」「休養」を良質でバランスよく実践できる拠点が必要とされ、「タニタカフェ」を公設民営で設置した。

また「ながおかタニタ健康くらぶ」という、会員には会員証代わりに活動量計配布し市内のいたるところでデータを読み取るようにしたソフト面も整備した。

会員向けの健康セミナーの開催への参加や運動量に応じてのポイント付与を行い、ポイントに応じて「タニタカフェ」での飲食、市が用意した景品との交換が行える。

会員にアンケートを実施したところ、健康くらぶに加入して健康になったと感じるに約7割、健康くらぶに満足しているに7割という結果になっている。

#### （2）主な質疑応答

Q 健康くらぶの世代構成はどのようになっているのか。

A 男性3割、女性7割。50代、60代が中心となり、ついで70代、40代、30代となっている。

Q 周知はどのように行っているか。

A 各地でセミナーを5、6回実施している。また口コミでの広がりもあると考えられる。何度も話の話題に上がることが一番の効果と思われる。

Q 年間の経費はどれほどか。

A 年間約6,000万円ほどになっている。景品およそ800万円。主にシステム整備が占めている。

経費削減として、スマートフォンが活用できないか研究している。

### (3) 参考なる点及び課題

課題として、現役世代の会員数が少ない傾向にあり、協会けんぽとの連携を模索している。

また、健康への効果の実証をどのようにしていくか検証しているところである。

### ◎視察成果による当局への提言または要望等

高齢化という点で、桐生市は長岡市よりも高いなかにある。さまざまな観点からどの世代も健康でいられるよう、研究する必要がある。

### ◎視察概要

視察項目 ・子育ての駅について

#### (1) 説明要旨

長岡市では、子どもに合わせた一貫した支援体制を構築するために、平成19年4月教育委員会に「子ども家庭課」と「保育課」を新設し、子どもの施策を統合した。

この施策のなかで、「雨や雪の日でも子どもをのびのび遊ばせたい」という要望に応える形で、市内4か所に屋根付き施設を含めた公園、子育ての駅を開設した。

平25年5月開設の子育ての駅「てくてく」の平成27年度入館数は152,350人、1日平均484人となっている。

施設内には3つエリアに分かれ、安全性の高い遊具や保護者がいっしょに遊んだり、絵本を読んだりできるスペースがある。

子育ての駅のほか長岡市では、フィンランドのネルボラと呼ばれる、出

産から子育てのまで切れ目のない支援制度を参考にし、母親がリラックスできる産後ケア「ままりら」助産師や保健師との連携による産後ケアプランの作成などの事業を展開している。

(2) 主な質疑応答

Q 子育ての駅事業による移住はどの程度か。

A あまりいないと聞いている。

Q 市に待機児童はいるのか。

A 公式にはいる。平成28年度、29年度で小規模保育を整備していく。

(3) 参考なる点及び課題

屋根付きの公園の整備は、天候に関係なく子どもを遊ばせることができるため、大変有意義である。

◎視察成果による当局への提言または要望等

切れ目のない子育て支援施策にあたり、福祉分野と教育分野での部局間の連携、体制を検討する必要があるのではないか。

財政面からみて、民間の力を最大限発揮できるようにすることも必要であろう。